小田原教育

第120号

平成２６年３月１４日

アサギマダラ

アサギマダラは、気流に乗って緩やかに飛ぶ蝶です。2，000キロメートル以上飛んだという記録もあるようです。

この写真は、長興山周辺で行われた自然観察会に参加した小学生が撮影したものです。羽を広げて休んでいるアサギマダラの様子がよく伝わってきます。この後、どこに旅するのでしょうか。

目　　次

巻頭言 …… 2
「研究・研修への姿勢を再確認」 教育研究所連絡協議会委員長 西村　泰和

1　小さなこころみ …… 3
「児童生徒の内的な意欲を刺激する」　児童生徒の学習意欲に関する研究員

2　学びの架け橋 …… 4
プロジェクト研究

3　ある教室から …… 5
「English is so interesting！」　教育指導課指導主事　北村　しのぶ

4　研究所だより
①パワーアップ研修 …… 6
②未来学舎 …… 7
③教育研究所事業を振り返って …… 8

研究・研修への姿勢を再確認

教育研究所連絡協議会委員長
西　村　　泰　和

子どもの学習意欲や体力の低下、不登校、いじめ、問題行動など、対応しなければならない課題が多く生じ、教育に対する社会的な要請は増大し、教職員の業務は、さらに多様化・煩雑化して、教職員の多くが、子どもと向き合う時間を十分に確保できないと実感している。

一方で、全国的に見て、今後１０年間に全体の約３分の１にあたる経験豊かな教職員が退職し、経験の浅い教職員が大半を占めることになる。現在、市内の小学校でも、教職員の約５割が経験１０年以下という構成のアンバランスが生じている学校がある。今後さらに、教職員一人ひとりの力量の向上、特に若い教職員への期待がますます高まってくる。

教職員の資質向上は、行政による各種研修の実施に加え、校内における OJT による人材育成や校内研究の活性化が進められているが、根底には、研修に対する教職員の意識そのものが重要であり、自ら学び続けることを実践する必要がある。このことは、言うは易しいが、大変難しいことである。

１月１６日（木）、『おだわら未来学舎』が、「教師力をみがく～教師は授業で勝負する～(講師:小林宏己氏　早稲田大学教授)」をテーマに開催された。『おだわら未来学舎』は、学校経営や教科指導、学校が抱える様々な課題などの知識と実践力の向上をめざし、教師としての専門性と人間性を高めることを目的に、市内幼稚園・小中学校の教職員が、勤務時間外の午後６時半から自主的に集まる希望研修である。

今年度は、全６回の開催で、参加者延べ約４５０名が参加し、最終回のその日は、約１２０名と市内の教職員の１割以上が参加した。参加者の年齢層には幅があるが、特に若い教職員の参加が多く、自らの教師力を磨こうという意気込みが強く感じられた。終了予定時刻を３０分もオーバーしても、ざわめく様子はまったくなく、それどころか講話への集中力はさらに増し、その真剣さに驚かされた。教職員が、自ら研鑽を積み、着実に力をつけていると実感するひとときだった。この雰囲気がどの職場でもと願わずにはいられなかった。

教職員は、教職に対する使命感や責任感を強く持つと共に、新たな学びを展開できる実践的指導力、専門的知識や地域との連携・協力する力、さらに社会の急速な進展の中で、知識や技能を絶えず学び続ける姿勢などが求められる。

『未来を拓くおだわらっ子・小田原市学校教育振興基本計画（平成２５～２９年度)』では、めざす教師像を、子どもと真剣に向き合う教師、実践的指導力のある教師、専門的な知識と技能を兼ね備えた教師、新たな知識と技術を習得するための向上心を持つ教師、信頼される豊かな人間性を持つ教師と掲げている。

子どもの学校生活の大半を占める授業の改善、一人ひとりの子どもに向き合う適切な指導・支援、さらに新たに導入された校務支援システムの習得と活用など、これからも業務は山積みである。

しかし、未来を拓くおだわらっ子の育成のために、めざす教師像により近づくよう、自らの心身の健康の保持・増進を心がけ、研修を大切にする意識を失わず、自ら学び続けながら教師力を磨きたい。

児童生徒の内的な意欲を刺激する

児童生徒の学習意欲に関する研究員
堤　　智（足柄小学校）　土肥　由実（矢作小学校）
長谷川　ゆき（下中小学校）
加藤　直樹（城山中学校）　西山　篤（泉中学校）

国内外の調査等によって、昨今の日本の児童生徒の学習意欲の低下が懸念事項として挙げられています。現行の学習指導要領では、学力の３要素の一つとして「学習意欲」について明記されています。私たちは、昨年度より２年間、小田原の子どもたちの学習意欲について研究してきました。

研究の一番の成果は、「学習意欲の向上に関する研究」の方法・手段の一例を提示することができたことです。私たちは、研究の方法・手段を探ることに多くの時間を費やしました。そもそも、「意欲」というものが、「将来役に立つから」とか「この問題が解けたら何か褒美がもらえる」などの外部からの働きかけによって、簡単に高めたり指導できたりするものではないからです。

１年目は、いろいろな文献等を参考に、「意欲的な姿」を明確にするためのアンケート作りなどを行いました。２年目にはそのアンケートを市内の小・中学校で実施し、小田原市全体の児童、生徒の学習意欲に関する特徴を分析し、具体的な手立てを打ち出しました。

「アンケートを実施し、その後分析、調査結果の報告」というのが一般的な研究の形です。本研究ではそこから一歩踏み出し、市全体の課題に対応するひとつの指針「ねばっこく学ぶ」というキーワードを見つけることができました。そして、「ねばっこく学ぶ姿を具現化するための授業づくり」のために次の３つのポイントを教師が意識して取り組むことを、２年目の研究内容としました。

①学習したことを理解したという実感や充実感をもてること

②学習のしかたが示されていること

③友だちと考えることを楽しむ雰囲気があること

さらに、各校･各クラスの特徴を分析し、それに合わせた授業づくりを研究員が実践しました。特に、１２月の公開研究会における土肥研究員の授業では、研究の方法・手段の妥当性を確認することができました。公開授業の中で「まぼろし法」という言葉が印象に残りましたが、児童にとっても一生記憶に残る算数用語になったはずです。教科書を基本としながらも、言葉ひとつ工夫するだけで、児童の内的な意欲に刺激を与えることができるのです。

また、意欲の向上のためには、授業を「自分たちの学習としてとらえること」が大切であることを実感しました。それは、授業の目標が明確に示され、教わるではなく、児童が自分たちの考えた方法で解決していくという場面に見てとれました。

「意欲」というものは個人の内的な環境に左右されるものですが、教師の働きかけによってその内的な部分に刺激を与えることが可能なことが分かりました。１２月の土肥研究員の公開授業の後、クラスの保護者から面談の中で「算数が嫌いで苦手な我が子が、家で『算数が楽しい』と言い出した」と話があったそうです。これ以上の教師冥利に尽きる言葉はないと思います。

課題としては、市全体の特徴をふまえ、各小中学校の実態に合わせた授業づくりを実践していくことです。さらに、指導者が各クラスでの取り組みを熟考することが児童生徒の学習意欲の向上には不可欠になります。

本研究では、「学習意欲の向上に関すること」のいろいろな要素についての調査分析までは行いました。しかし焦点をあてたのはその中の一部分に過ぎません。別の要素についても具体的な取り組みを考え、実践していくことが今後の課題であると考えます。

プロジェクト研究
～２年間の教科研究～

算数・数学部会　　理科部会　　外国語部会

昨年度から続いていた２年間の研究が終わりました。プロジェクト研究は、小学校と中学校の教員が連携し、研究の成果を小田原市の小・中学校の教育活動に活かしていくこととを目的としています。研究の内容を簡単ですが、ここで紹介させていただきます。

《算数・数学》

思考力・表現力を育成する算数・数学の授業設計
～言語活動の充実をめざして～

本年度は、昨年度の課題もふまえて、次のような確認をして研究を進めました。また、授業研究では、横浜国立大学教授　石田　淳一先生にご指導をいただきました。

「思考力・表現力が高まった姿」とは

既習事項を活用して筋道を立てて進むことができ、自ら考えたことをわかりやすく記述し、論理的に説明することができるようになること。

言語活動を充実させる教師の手立て

①子どもが本気・やる気になり、多様な見方や考え方が可能な学習課題を提示する。
②協同学習により、一人ひとりができるだけ多く話せる場を設ける。
③他者の考えた式や図などの表す意味を読み取り、どんな考え方をしているのか、何が分かるかについて説明する活動を取り入れる。

公開授業

単元名　６年「比例と反比例」

まとめ

学び合いのある授業とは、「友達につなぐ」こと「習ったことにつなぐ」こと、そして「自分の考えにつなぐ」ことであると感じた。

《理　科》

理科好きな子を育てる学習の工夫
～小中の理科学習を通して～

本年度は、「根拠ある考察を、言語活動を通して育んでいく」ことを目標とし、次のことを確認し、小田原市教育委員会の指導主事の指導も受けながら、授業研究を通して、研究を進めました。

「理科好きな子」とは

「主体的に取り組み考える楽しさを味わえる子」と定義。

公開授業

単元名　５年「もののとけ方」

まとめ

小中連携の観点が大事である。小学校の授業によって、中学の礎を築く。公開授業では、問題解決のために、実験方法等を自ら考え、楽しみながら取り組む子どもの姿が見られた。考察の視点を与えられることで、より科学的にものをとらえることを経験的に学んでいた。

《外国語活動》

外国語活動で育む「思考力」「表現力」「判断力」とは　～臨場感あふれる授業をめざして～

本年度は、昨年度の課題もふまえて、授業実践をしてきました。また、英語教育アドバイザー　碓井　淑美　先生にご指導をいただきました。碓井先生のご指導のもと、絵本を使った授業の提案や、学習指導計画の作成を行い、研究を深めました。

先進校の視察

静岡県にある加藤学園暁秀初等学校の授業を、半日参観した。

絵本を使った学習のつくりかた

１冊の絵本をもとに、児童生徒が「やりたくなる」授業展開を考え、指導計画を作成した。

公開授業

単元名　６年「絵本で楽しむ外国語」

まとめ

繰り返しの表現を楽しむことができる絵本を教材とし、文を作る活動を行ったが、子どもたちはとても意欲的に活動していた、Hi Friends にある構文に対応した絵本を選び、そこから子どもが「やりたくなる」活動を考えるという学習の組み立てができた。

English is so interesting！
♪ やっぱり英語は楽しい♪

教育指導課指導主事
北　村　　しのぶ

小学校外国語活動の授業を参観する度に、担任の先生の思いが伝わってくる。ＡＬＴの力を借りつつも、工夫されたプランや丁寧に準備された教材はクラスの状況を踏まえて考えられたものであることが、授業を受ける子どもたちの表情や意欲的に取り組む姿勢からわかる。小学校の授業を参観した中学校英語科教員からは､「子どもたちが楽しく活動している。」「思っていた以上に充実した活動内容である。」「これだけの内容を小学校で実践していることに驚いた。」などの感想をいただいた。

さて、本日の「教室」は中学校の英語の授業である。授業の中で、「なるほど」と感じた場面をいくつか紹介する。**【*『』*** 内は英語科教員による英語での指示。＜　＞内はＡＬＴの英語による指示である**】**

まずは、授業開始前。ＡＬＴが登場する前に、***『先生が来たら拍手しよう。』***と英語科教員が投げかけることで、生徒自身が英語の学習モードに切り替わる。英語科教員が、英語と日本語を織り交ぜながら、「今日もベストを尽くそう。good-better-best！」と伝えた後に、ワークシートを使って 35 個の単語を原級・比較級・最上級の順で発音練習していく。発音練習はＡＬＴが担当することが多いが、ここでは同じく英語のプロである英語科教員。***『さあ、リピートして。』***ＡＬＴは生徒と一緒に練習しながら、cute は「かわいい・よりかわいい・一番かわいい」、fast は「速い・より速い・一番速い」など、単語の意味に合わせて表現力豊かに発音することで、生徒の関心・意欲を高めていた。実際、オーバーアクションで発音するＡＬＴを見て、同じように表現しようとする生徒の自発的な学びの姿が見られ、35 個という単語量がありながら、テンポよく発音練習が進んだ。

次はＡＬＴが中心となり授業を展開する。鼻をかみたいＡＬＴが、

＜ティッシュを探しているんだ。誰か持っていない？＞と生徒に聞く。一人の生徒が差し出す。

＜ありがとう。このキャラクター好きなの？そうか。（鼻をかんで）返すよ。（No と言う生徒）**え？いらない？ゴミ箱探さないと。ゴミ箱はどこか誰か知らない？＞**生徒たちは教室のゴミ箱を指差す。

＜ああ、ありがとう。 さて、今日のキーセンテンスは何かわかるかな。そう、 ～を探す、だね。＞

実際、ティッシュを持っている生徒がいるかどうかは尋ねてみないとわからない。次の展開がどうなるのかドキドキしながら生徒は集中してＡＬＴを見守り、自然と状況を理解する。この間一切日本語はない。キーセンテンスを練習した後、教科書の本文練習をする。そして、再び英語科教員へつなぐ。

後半はＡＬＴと練習した表現を取り入れてのゲーム（ペア・ワーク）を行った。日頃の授業でも教え合う環境が自然にできているのだろう。誰かが戸惑ったときに、周りが気づきやり方を伝えたり、男女が協力して活動したりする様子が見られた。

中学校では、英語の専門家である中学校英語科教員とＡＬＴが、１時間の授業を分担して指導する。上手に授業をプログラミングすることで、より効果的な授業を組み立てられるのだと実感した授業であった。

パワーアップ研修

意欲的な中堅教師、または若い教師をパワーアップすることをねらいとする研修です。今年度は、研究所長と２名の研修相談員が研修にあたり、小学校１７名、中学校６名、計２３名の研修者が１年間の研修を終えました。

小学校の部

現在、学校現場は、いじめ・不登校・学力不足等々、さまざまな課題を抱えていますが、当然のことながら、教職員の指導力向上は、これらを解決する上で最も有効な手段であり、教職員の指導力向上に直接関わるパワーアップ研修の果たす役割は大きいと言えます。

そのパワーアップ研修で、今年度、一番多く話題にしたことは、授業の『焦点化』です。これは、筑波大学附属小学校の桂　聖先生がその著書『国語授業のユニバーサルデザイン～全員が「わかる・できる」国語授業づくり～』（東洋館出版）で提唱されている「学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子が、楽しく、わかる・できるように工夫された授業」をするための３つの要件である「焦点化・視覚化・共有化」の一つです。

今年度のパワーアップ研修で、さまざまな授業を見せていただきました。その授業について話し合う中で、授業の「焦点化」（ねらいや活動を絞ること）を図ることが大変難しいこと、また、「全員の子が、楽しく、わかる・できる授業」を工夫する上で、「焦点化」が最も重要な要件であることに改めて気付かされました。

「簡単そうでもいざやると難しい。これまでごまかしてやってきたなと感ずる。」

これは、ある研修者の先生の言葉です。パワーアップ研修を受講された先生方が、これを機会に更に自己啓発に努め、教職に専念されるよう祈っています。

（文責　小宮　隆雄　研修相談員）

中学校の部

中学校のパワーアップ研修では、数学科３名、英語科２名、美術科１名の計６名、それぞれが抱えている課題を研修のテーマとして、授業研究を中心に行いました。

研修を終えた先生方が成果や課題として挙げたことをご紹介します。

- 授業準備に教師が時間をかければかけるほど生徒のやる気に反映される。
- 生徒の活動を多くし、体験しながら学ぶことの大切さを感じた。
- 集団の中で他者と関わる力を身につけることの大切さを、授業を通して伝えることができたのではないかと思う
- 教師主導で進めるより、生徒が主体的に学ぶ場面が増え、”教え込む”より”学び合う”授業を心がけるようになった。
- 授業を振り返り、課題を見つけ、それを解決するために計画的に研究を積み重ねることができた。
- 教師が教えて生徒が理解するといった流れが授業の形だと思い込んでいる部分があったことに、この研修を通して気がつくことができた。
- 教師がどこまで生徒の目線で考えられ、行動や発言が予想でき準備できるかが課題である。
- この研修を通して「教える」ことの原点を再考する良い機会になったのではないかと思います。

この研修を受けられた先生方が、生徒理解に努め、自らの授業改善に取り組み、生徒たちが、「わかった」「できた」と“学習のよろこびを感じ取れるような授業”をめざして日々研鑽してほしいと思います。

（文責　小川　護　研修相談員）

おだわら未来学舎
～教師のための自己研鑽の場として～

今年度もたくさんの方々にご参加いただきました。来てくださった講師の先生方からは、「自主研修の場にたくさんの参加があることはすばらしいこと」と、お褒めの言葉をいただいております。地道な研修会ではありますが、自己研鑽の場として来年も継続する予定です。みなさまのご参加、お待ちしております。

第１回テーマ
反社会的傾向のある子に対する児童生徒指導
講師　栢沼　行雄　先生

当時大学の講師だった現教育長より、温かい関わりの中で子どもの育ちを願う指導者の姿について、具体的にお話をしていただきました。

いろいろと考えさせられました。子どもの心を開くにはどうしたら…と、そのむずかしさを感じています。今日の先生のお話から、再度関わり方を考え、積極的生徒指導に取り組もうと「気持ち」をいただきました。
（中学校教諭）

第２回テーマ
「対話力」
～対話力の指導の考え方と方法～
講師　多田　孝志　先生

厳しい現実や意見の対立を直視しつつも多様な人々と協働し、新たな知恵や解決策をともに創ることのできる「対話力」についてお話をしていただきました。

クラスの子を思い浮かべると、確かに偽りのやさしさや思いやりから反論したり説得したりする姿が少ないです。相手の考えを大切にするからこそ、反論や批判が必要になるということを子どもたちに伝えていきたいと思います。（小学校教諭）

第３回テーマ
『確かな学力』を育てるために必要な教師の力
講師　高階　玲治　先生

子どもたちに『確かな学力』をつけるために、教師もつけるべき力とは何か。また、学力向上に必要なのは創造力だというお話をしていただきました。

子どもの「学校に行く！」は「学級に行く！」という言葉に納得しました。いかに、学級のベース、授業のベースが大切であるか、改めて考えさせられました。
知識を活用する力⇒創造力　は伸びる！（小学校教諭）

第４回テーマ
子どものこころ
詩のこころ
講師　工藤　直子　先生

子どもの豊かな心を育むために、大人も子どもの心になることができました。工藤先生自ら、様々な詩の読み方をしてくださいました。

幼児期にいろいろな感情体験をすることで感性を高められるよう、読み聞かせたり、日々の生活を送ったりする保育をしていきたい。詩や絵本一つでも、言葉遊びを展開していくことで違った楽しみかたができることがわかりました。（幼稚園教諭）

第５回テーマ
『スポ育』でコミュニケーション能力を育てよう
講師　ブラインドサッカー協会

ワークショップ形式の研修でした。コミュニケーションについて、改めて考える機会となりました。実際にプレイヤーの方も、講師として来ていただきました。

今回は、相手のことを考え、自分の思いをわかりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えるワークショップであることに、とても驚きました。また、チームの仲間を信頼できないと、自分の中の恐怖心が払拭できないことも体感しました。（小学校教諭）

第６回テーマ
『教師力』をみがく
～教師は授業で勝負する～
講師　小林　宏己　先生

子どもたちの可能性に寄り添い、その基礎となる学びを支える教師に必要な力についてお話していただきました。教師は授業で勝負する！と再認識できました。

もう一度自身の授業を見直し、記憶に残る『あの時、あんな授業をしてて…』と、いつか教え子に言われるようになりたいと思いました。少しぬるま湯につかっていたところもありました。また明日から教材研究がんばります。
（中学校教諭）

研究所だより③

見る、感じる、学ぶ、やってみる！

～一年間の教育研究所事業を振り返って～

今年度の研究所の事業の振り返りです。簡単ではありますが、みなさまに少しでも興味をもっていただき、日頃の教育活動に活かしていただければ幸いです。

★共同研究★　*詳細は、配布される冊子「共同研究のまとめ」をご覧ください。*

『学習の困難さに対応した支援に関する研究』『小田原版市民教育の教材開発に関する研究』
『児童生徒の学習意欲の向上に関する研究』…　Ｐ３参照

２年間、研究員、研究所職員と共に研究を進めてきました。今年は、２年目を迎えた３つの研究が公開研究会を開催しました。どの研究も普段の授業で必要なことばかりですので、ぜひ参考にしていただきたいです。

なお、「幼保・小の連携に関する研究」については、今年度１年目ですので、来年度も継続して研究します。

★プロジェクト研究　公開授業★　*まとめを各校に配布しますのでご覧ください。*

★教育講演会★　*詳細は、前号に掲載しました。*

★学習指導法研修会★

今年度は、国語科で研修を行いました。国立教育政策研究所の杉本直美先生を講師としてお招きし、講話や授業研究をとおして、指導法についてご指導いただきました。研修参加者をとおして、校内での授業改善に役立てていただきたいと思っています。

来年度も引き続き研修会を開催します。詳細は、新年度にお知らせします。

★「わたしたちの小田原」活用検討委員会★

社会科副読本「わたしたちの小田原」の全面改訂版が、平成２６年度の３年生から配付されます。活用委員会では副読本を使用した学習の展開例や資料を検討してきました。冊子で配布するだけでなく、校務支援システムでも利用できるようにしますので、ぜひご活用ください。

★パワーアップ研修★　*詳しくは、Ｐ６をご覧ください。*

来年度も、意欲ある若手教員を応援するための研修会を実施します。

★おだわら未来学舎★　*詳しくは、Ｐ７をご覧ください。*

★自然観察会★　*詳しくは、研究所ホームページをご覧ください。*

今年度は天候に恵まれ、予定した８回を全て開催することができました。参加者は、のべ２５７名でした。来年度、観察会は１００回目を迎えます。子どもも大人も新しい発見が連続の観察会に、先生方もぜひご参加ください。

★蔵書の貸出★　*蔵書については、校務支援システム内の連絡掲示板をご覧ください。*

年度末に新しい書籍を購入します。教科、道徳等の授業、児童生徒指導、特別支援に関わるもの等々、４０冊ほどの書籍が新しく入りますので、ご興味のある方は校務支援システム内連絡掲示板（市内小中教員のみ閲覧可）をご覧いただくか、お問い合わせください。

◇◇◇今年度も、教育研究所の事業へのご協力やご参加、ありがとうございました◇◇◇

小田原教育　第１２０号
発行日　平成２６年３月１４日　発行者　教育研究所長　椎野　美乃
発行所　小田原市教育研究所
〒250-8555　小田原市荻窪 300 番地　TEL　３３－１７３０